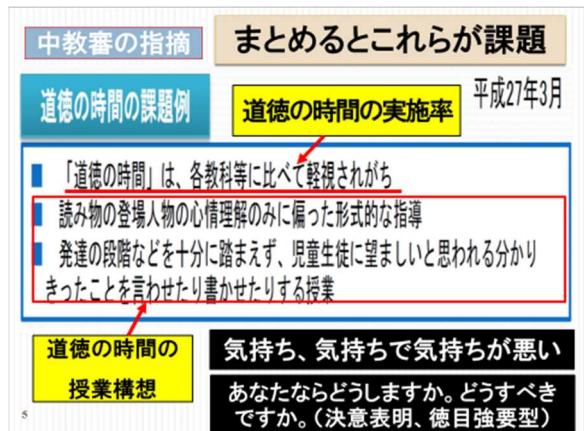


# 道徳指導における基礎基本

## 1 何を改善すべきなのか

「考え、議論する道徳科へ」の転換をめざした今回の道徳教育の改訂は昭和33年の特設道徳に匹敵する大改革という認識が筆者にはある。改革である以上、道徳の授業構想及び指導の在り方にまで改善が求められているということであり、それは自分の授業観や授業イメージを変えるということなのである。

平成27年3月、小学校、中学校の学習指導要領の一部改正告示がなされ、ここに第3章道徳は「特別の教科 道徳」に改められ、「考え、



中教審の指摘	まとめるとこれらが課題	平成27年3月
道徳の時間の課題例	道徳の時間の実施率	
「道徳の時間」は、各教科等に比べて <del>軽視</del> されがち 読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導 発達の段階などを十分に踏まえず、児童生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業	気持ち、気持ちで気持ちが悪い あなたならどうしますか。どうすべきですか。(決意表明、徳目強要型)	

「議論する道徳」に向けて、抜本的な改善・充実が求められたのであった。ここに上げられた「道徳の時間の課題例」は真摯に受け止めるべきであろう。

課題の第1は、「道徳の時間」の実施実態の指摘である。詳しくは述べないが、道徳の時間は、ズワイガニがカニカマに化けていたような実態があり、それは、自校の学校教育目標の実現を目指して編成されているはずの教育課程の構造と体系を崩し、知徳体のバランスを著しく欠いていたということである。

赤囲みした二つは、道徳の時間の授業構想にかかるもので、授業観を変えようということである。道徳の授業と言えば、読み物の登場人物の心情を数回読解させ、自分の生活の振り返り

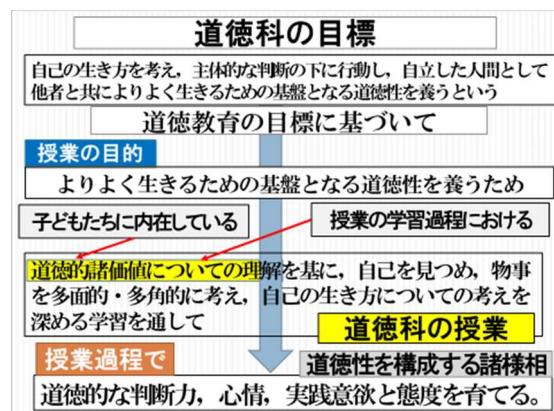
をさせて教師が説話する。そのパターンが道徳科授業の固定的イメージになっているようにも見えるが、それは何のためかと問われても答えを有してはいない。

児童生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業も同様で、「あなたならどうしますか」「これからどうしますか」(決意表明型、徳目強要型授業)と聞いても、子どもは流石で、先生の意を忖度して答えるか、沈黙するかだけである。そもそもが、資料は、そこに描かれた状況の中で、自然と「自分ならどうするか」を考えるように仕組まれており、改めて問う必要はないのである。

同時に、道徳教育の抜本的改善と充実が求められている背景には、子どもたちの生きる2030年社会が、定まった答えのない予測困難な時代であり、2030年社会を生きる子どもたちには、多様な他者と議論を重ねて探究し、「納得解」を得るために資質・能力が求められ、道徳教育はそのために大きな役割を果たす必要があるという認識があることを意識しておきたい。中教審が課題例にあげたような授業では、とうてい、このような道徳科の使命には応えられないるのである。

## 2 どのような授業づくりをするか

授業づくりにおいて、基本にすべきは「目標



道徳科の目標  
自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として  
他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うという  
道徳教育の目標に基づいて

授業の目的  
よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため

子どもたちに内在している  
授業の学習過程における

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を  
多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考え方を  
深める学習を通して  
道徳科の授業

授業過程で  
道徳性を構成する諸様相  
道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

」である。「教科の特質」を踏まえて、この目標実現に向けた指導の在り方が問われるが、道徳科も例外ではない。

道徳科の授業は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ためであり、授業を通して道徳性を構成する諸様相である「道徳的判断力」「道徳的心情」「道徳的実践意欲態度」を、その過程において育てていこうというものである。今回の改訂では目標の書きぶりにも大きな改善が加えられている。

他の教科等と同様に目標の中に、学習のありようが示されていることが特筆すべきことである。道徳科では、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考え方を深める学習を通して」になっているが、このことは、子どもたちが、ここに示されたような学習の過程において、道徳教育・道徳科で育てることをめざす資質や能力である道徳性をはぐくむことを目標にしているという意味である。

授業像は道徳科の特質の中によく示されている。この特質の中で、筆者が授業づくりの基本としたいのは、①と③④⑤である。

#### ○子どもは道徳的価値を有している

ねらいに含まれる道徳的価値について、子どもは空っぽではないことを①は意味している。子どもたちは、道徳的萌芽をもって生まれ、発達の過程において、一人一人がそれぞれに様々な道徳的な価値に遭遇し、道徳的価値を育みながら現在に至っている。中学生ともなれば、信じて疑うことのない価値観が

「常識」となって内在しており、物事を価値付けたり、思考や行動の原理となったりしている。だから、道徳科の授業は、ねらいに含まれる道徳的価値（教材に込められている）と子どもたちに内在している道徳的価値との間でやりとりしながら展開していくのである。

#### ○道徳性は内面的資質

③④⑤は「道徳性は内面的資質」がキーワー

ドになる。

道徳性は、「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤」である。傍線

道徳科の特質  
新解説P76 第2節 道徳科の指導  
1 指導の基本方針  
(1)道徳科の特質を理解する

道徳科は教材に内包された  
①児童一人一人が、ねらいに含まれる  
一定の道徳的価値についての理解を  
基に  
②自己を見つめ、重要点  
物事を多面的・多角的に考え、  
諸価値は複雑に 現実社会  
絡み合う  
③自己の生き方についての考え方  
を深める学習を通して、  
④内面的資質としての道徳性を  
⑤主体的に養っていく時間である。  
15  
自らがよりよく生きができるように

子どもに内在する  
道徳的価値を基に。  
答えは一つではない  
自分との対話  
態度や行動を  
指導するのでは  
ない

部の主語は「子ども」で、「考え」も「判断」も「他者とともにによりよく生きよう」とするのも内面の働きである。

道徳性は内面的な資質。だとしたら、それを、他者が「教えきること」も「指導しきることも」不可能で、子ども自身の「自ら」や「主体性」に依らざるを得ないのである。

#### 4 子ども自らが学ぶ道徳科の授業へ

##### (1) 意味のある問い合わせから学びは始まる

平成27年7月の道徳科解説には、26年10月の中教審答申を踏まえて、考える道徳、議論する道徳として、次のような道徳教育の在り方が示されている。「①時に対立がある場合を含めて、多様な価値観の存在を認識しつつ、②自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、③よりよい方向を目指す資質・能力を備えることがこれまで以上に重要」。

①多様な価値観を認識するには、授業に臨んでいる学級成員それぞれの意見や考えを表出することが前提で、それなくしては「多様な価値観の存在」など認識できない。①がなければ②「他者と対話し協働」もできない。また、そのような場がなければ「自ら感じ、考え」もできず、②がなければ③よりよい方向を目指す資質・能力は育めないのである。

そう理解すると、「学級成員が自分の意見や

考えを述べる」ということが、授業づくりの基盤になることが理解できるだろう。しかも、それらは絡まなくては②につながってはいかないから、何について考えるのかを共有することが必要なのである。学級全体の追究課題といつてもよい。

そのために教材が働く。教材は、子どもたちが道徳的価値（内容項目）を具体的に脚色するなどして子どもが学べるように仕立てたもので、それを使用することで、学級メンバーが同じ土俵に乗るという意味をもつ。この教材を介してそれが意味のある問いを形成することである。心情読み解きに偏っていては教材を理解するだけに終わり、教材に込められた道徳的価値に向かい、考え合うことなどはできない。教材の扱いも変わる。北が述べるように（注1）、その後の学び合いを可能にする連結器としての役割を果たすように、意味のある問いを共有する媒体として位置づけたい。

例えば、バルセロナ五輪水泳200メートル平泳ぎで優勝した中学生、岩崎恭子選手を教材にした「金メダルより大切なものの」（注2）がある。バルセロナでは優勝してもアトランタでは決勝にも進めず、10位に終わった彼女の「やりとげた」というか、「心がスカッとした」ということばを取り上げて、その心情を聞いたとしても、「克己や強い意志」にはつながらない。「決勝にも進めなかつたのに、こんな気持ちになれるのだろうか」。こんな問いを発したとき、子どもたちは部活動等の体験を重ねて、悔しさで一杯だらうになあと、この言葉に問い合わせが生まれ、バルセロナからアトランタの間の彼女の練習に伺える、「強い意志」ぶりに目が向くようになる。そして、そこに表出された子どもの意見や考えは、それ自体が学びの対象になって、多面的、多角的に考える教材にもなっていくのである。

## （2）主体的な学びができる条件

授業に臨んでいる学級メンバーそれぞれの意見や考えを表出することが前提だと（1）で述べた。

これには二つの要件が必要である。

一つは、前述したように、何を考え、話し合えばいいかが明確であることである。

二つは学級づくりに関することで、「何でも言える雰囲気が学級にあること。反応してくれる先生やクラスメートがいて、笑顔が絶えない学級」であることである。

これには、重要な他者からの温かなまなざしが源泉になる。温かなまなざしは肯定的な自己概念を形成し、それは自尊感情なり自己有用感になって、関心・意欲のガソリンとなり、物事に対する能動性を生み出していく。

このことについては、中学生の発達段階も留意すべきで、中学生にとって、重要な他者は、親や教師から仲間へと移り、仲間集団の言葉や態度に強く左右されるようになってくる。だからこそ、一人一人の生徒が、他の生徒へのかかわり方や態度を、自分の生き方として見つめるよう促すことや、生徒間の友情や信頼関係が極めて重要になるのである。

## 5 道徳を指導する教師の基本姿勢と技術

結びに、道徳教育を指導する教師の立ち位置と技術について述べておく。

道徳教育は道徳性を養うのが目標であるが、その道徳性は人格の基盤とも言われている。教育は人格の完成をめざし、であるから人格は完成しておらず、みな永遠に人格の完成の途上にある。だから、教師は子どもと同じ地平線に立ち、定義のない道徳的価値について考え、納得解を追究するような授業を目指したいのである。

道徳指導の基本技術は「察する」である。思考は内面で行われるから、表情やしぐさから子どもの内面を読み取る術が基本になる。しかも「肯定的に」である。子どもが、深く考えているときは言葉を失っている。それを見いだし、見つめられる教師でありたい。

注1 北俊夫 学校教育No.1172 広島大附属小 p9

注2 「心ゆたかに」（静岡教育出版社）掲載資料